

匹見町内遺跡詳細分布調査報告書Ⅷ

匹見町埋蔵文化財調査報告第18集

平成8年3月

島根県匹見町教育委員会

匹見町内遺跡詳細分布調査報告書Ⅷ

匹見町埋蔵文化財調査報告第18集

平成8年3月

島根県匹見町教育委員会

序 文

本書は、道川地区県営圃場整備事業に伴い、益田農林事務所から委託を受けて行った埋蔵文化財の調査記録であります。

本報告のとおり、当該地区（臼木谷・赤谷）において5地点を発掘調査しておりますが、そのうちの4地点では無文化であったようあります。しかし、塙ノ町地点では考古学上での遺物包含層が検出されており、同地点周辺の文化の一端を垣間見ることができたことは、文化行政を預かるものとして喜ばねばなりません。このたびの調査はあくまでも分布調査でありますので、該地点の文化形態は明らかになっていませんが、今後の調査を通じて認識できるものと思われますし、立証してゆくことに努力してゆかなければならぬと考えております。

本事業も今回をもって一様終わることになり、当初の計画通りに推進したことは喜ばしい限りであります。勿論、これにはご諸氏及び関係者のご支援、ご協力に支えられて成ったことを忘れてはならないと思います。ここに厚くお礼を申し上げるとともに、今後ともなお一層の文化行政にご理解を賜りますよう念じて序文と致します。

匹見町教育委員会

教育長 齊藤惟人

例　　言

1. 本書は、平成7年度国庫開拓整備事業として、匹見町教育委員会が行った町内遺跡詳細分布調査の報告書である。
2. 調査は、島根県教育委員会文化課の指導を得て、次のような体制で実施した。

調査指導　島根県教育委員会文化課

島根大学法文学部教授　　田中 義昭

広島大学文学部教授　　河瀬 正利

山口大学人文学部教授　　中村 友博

事務局　匹見町教育委員会教育長

斎藤 惠人

匹見町教育委員会次長　　渡辺 隆

匹見町教育委員会社会教育主事　　河野 敏幸

匹見町教育委員会文化財保護専門員　　渡辺友千代

調査補助員　栗田 美文　中井 将胤　大賀 幸恵　大谷 真弓

調査参加者　栗田 定　森脇 雅夫　渡辺 照　岡本 弘

渡辺 勉　入沢 悅　長谷川時子　山崎リマヨ

西田キヌエ　溝田 久子　塩道富美子　大谷 孝子

3. 発掘調査に際しては土地所有者をはじめとして、地元の方々に終始多大な協力をいただくとともに、また開拓整備事業担当者にもご協力いただいた。ここに感謝の意を表したい。
4. 本書に記載した配置図は縮尺1/1000のもので、匹見上地改良区のご協力を得、また調査地点図は縮尺1/25000を使用したものである。
5. 調査地点名は全て小字名をもって称することとし、また調査地点においては埋蔵文化財の包蔵地として確認されているものもあるが、本書においては遺跡名は使わず、全て末尾に調査地点を附して統一している。
6. 編集にあたっては、大賀幸恵・大谷真弓氏らのご協力を得て、執筆は渡辺隆・渡辺友千代・栗田美文・中井将胤（末文に示す）が担当し、編集は渡辺友千代がこれを行ったものである。

目 次

第1章 はじめに	(渡辺 隆・渡辺友千代)	1
第1節 調査に至る経緯と経過		1
第2節 地域環境		1
第2章 古苗代調査地点	(渡辺友千代)	9
第1節 地形的立地と歴史的景観		9
第2節 調査概要		9
第3節 結句		10
第3章 塚ノ町調査地点	(渡辺友千代)	11
第1節 地形的立地と歴史的景観		11
第2節 調査概要		12
第3節 結句		19
第4章 庵屋敷調査地点	(栗田 美文・渡辺友千代)	20
第1節 地形的立地と歴史的景観		20
第2節 調査概要		20
第3節 結句		24
第5章 麻田調査地点	(渡辺友千代)	27
第1節 地形的立地		27
第2節 調査概要		27
第3節 結句		28
第6章 泓ノ切調査地点	(中井 将帆・渡辺友千代)	30
第1節 地形的立地と歴史的景観		30
第2節 調査概要		30
第3節 結句		33
第7章 小結	(渡辺友千代)	34

挿 図 目 次

第1図 調査地点位置図(1)	1
第2図 圖場整備予定範囲図	3
第3図 調査地点位置図(2)	5
第4図 調査区配置図(古苗代)	7
第5図 土 層 図(北壁)	10
第6図 調査区配置図(塚ノ町)	13
第7図 土 層 図	15
第8図 出土遺物実測図	17
第9図 調査区配置図(庵屋敷)	21
第10図 土 層 図(北壁)	23
第11図 調査区配置図(麻田)	25
第12図 上 層 図(東壁)	28
第13図 調査区配置図(泓ノ切)	31
第14図 土 層 図(北壁)	33

図 版 目 次

図版 1	1. 古苗代地点遠望(南西から)	2. 掘削状況(西から)
図版 2	1. 塚ノ町地点遠望(南西から)	2. A区掘削状況
図版 3	1. C区掘削状況(北東隅)	2. 出上遺物
図版 4	1. 庵屋敷地点遠望(北から)	2. 調査区の北西側状況(南東から)
図版 5	1. 麻田地点遠望(西から)	2. 掘削状況と東壁状況
図版 6	1. 泓ノ切地点遠望(北東から)	2. 掘削状況と北壁状況

第1章 はじめに

第1節 調査に至る経緯と経過

平成4年10月19日付で、道川地区県営圃場整備事業の計画書が匹見町教育委員会に提出されてから、本事業である「匹見町内遺跡詳細分布調査」は平成5年度からスタートしたが、順調に初頭の計画どおり遂行することができた。

本事業を振り返ってみると、まず平成5年度に下道川地区で前田中地点・ダヤ前地点・ケ上地点・半兵衛屋敷地点の計4地点を調査。同6年度には前年度の

分布調査において明らかとなった前田中遺跡・ダヤ前遺跡の本格調査を実施し、同年の秋冬にかけて出合原・心組地区の分布調査を行ったのである。その調査地点名は、田中ノ尻・大町・山根・藪町の計4地点であった。^(注1)該当地区においては、田中ノ尻地点が遺跡であることが判明。よって、同7年の春夏にかけて本格を実施し、秋には本報告する5地点を調査し、本事業も3年を費やしたが、ここに終えることになったのである。

さて本年度、調査対象としたのは臼木谷・赤谷地区であった。これに先立ち平成6年6月22日には、山口大学人文学部の中村友博教授と同地区を踏査し、調査地点の5箇所を選定した(第3図)。これにもとづき同年12月13日には、まず最初の手続きとして文化庁に文化財関係補助事業計画書を提出する。以降、翌年にかけて発掘調査に係る諸手続きを行ない、現地調査は同7年11月1日から12月20日にかけて実施したものである。

(渡辺 隆)

第2節 地域環境

広島県に接した本地区は、島根県美濃郡匹見町の東北部に位置する(第1図)。その地区は、南東側に1,000m内外の中国脊梁山地が北東-南西方向に走り、北西側も同様に800m内外の山地が北

東・南西方向に走っていて、日本海側の美都町と接している。また北東側は、広島県と鳥取県那賀郡とに接して山岳地となっている。一方、対向する南西側は匹見町中央部に向かって開広していて、つまり本町の道川といわれる地区は、地形的に竹箕状を呈しているのである（第3図）。

中世代白亜記の火山活動によって形成されたといわれる本地区は、そのほとんどが流紋岩凝灰岩類で占められており、しかも幅8～15km、延長100kmに及ぶ大地溝帯（匹見断層群）から成っているといわれている。^{〔注1〕} その地溝帯は、本地区においては白木谷断層と俗称されて、中国背梁山地に沿って北東一南西方向に並走している。また、標高800～900m台が連なっている北西側の山地を越えると、そこは赤谷地区といい、やはり同様に北東一南西方向に延びる波佐・赤谷断層が貫通しているのである。したがって本地区の河川は、その2つの地溝帯に従って下流している。それは白木谷地内を流域とする匹見川本流であり、そしてもう1つは赤谷川である。これらの大さな2川は、いずれも標高1,060mを測る空山山塊に発して南西流している。また、この2川が相会する出合原地区は、道川村といわれた旧村時代（明治7年～昭和30年）の中心地であったのである。

行政区分でいう大字単位の本地区の道川は、中国背梁山地に沿う山間地であるため、古くから農林業を中心とした生業が営まれてきた。とくに豊富な森林は、藩制期において^{〔注2〕} 鋸を発展させており、現在その跡は37箇所が確認されている。それは本町においての鋸跡の50%に達しており、盛んであったことを裏付けているし（第3図）、また「木地屋ケ谷」^{〔注3〕}という地名があるよう、そこには山の民であった本地師も仮泊していたという地区でもあった。このように山林は生活域として利用され、一方地元民たちにとっては堆肥・焼烟栽培などの生産地でもあり、その焼烟には三極・楮が植培されて紙業は特に盛んであったのである。また明治期になると、その山林は木材・製炭などの生業の場としてきたが、次第にエネルギー源の変化などにより、昭和30年代ごろになると経済構造は大きく変化して1次産業は振るわなくなってしまった。加えて、昭和38年の豪雪は、離郷を余儀無くさせ、典型的な過疎地帯の地区となったのである。

（渡辺友千代）

〔注1〕 匹見町教育委員会『匹見町内遺跡詳細分布調査報告書Ⅶ』 平成6年3月

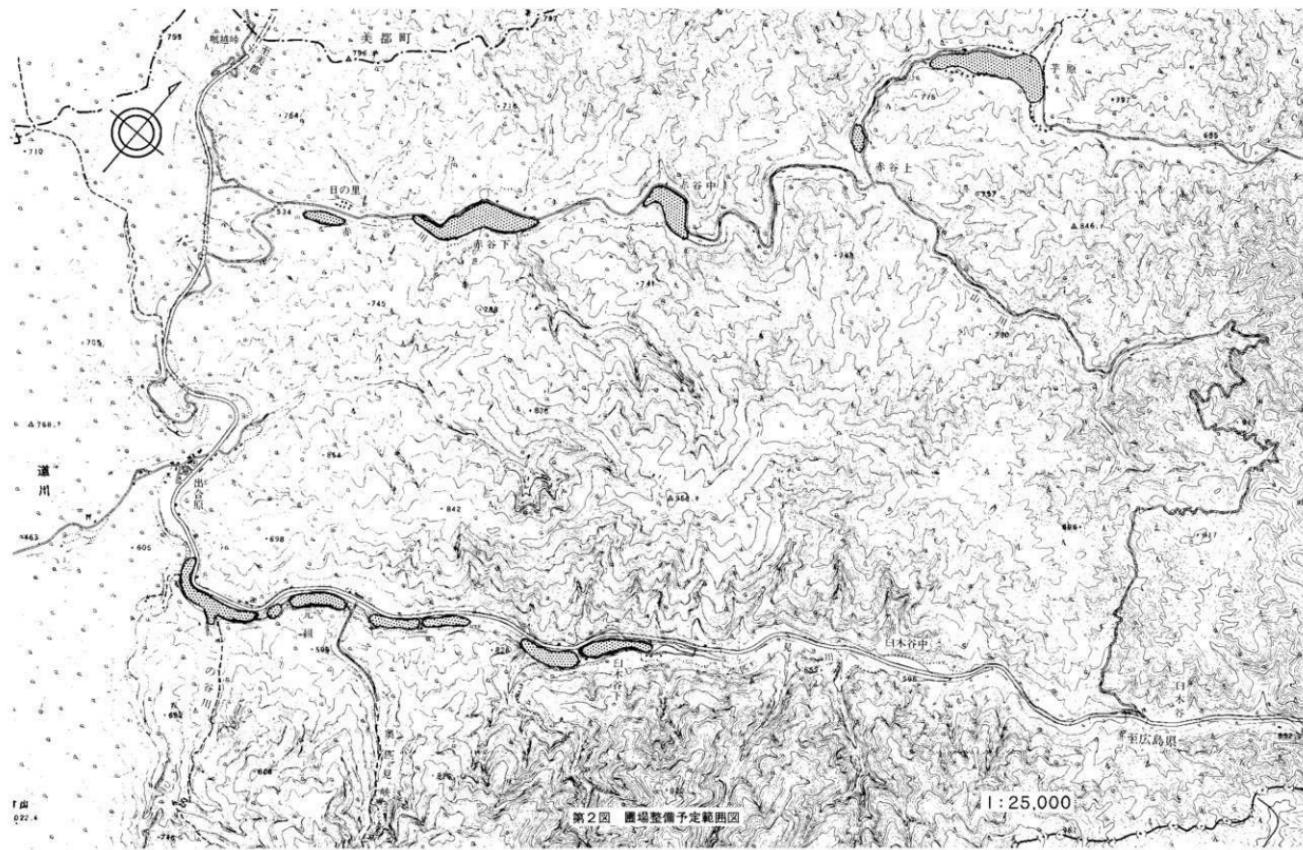
〔注2〕 匹見町教育委員会『前田中遺跡』 平成7年3月

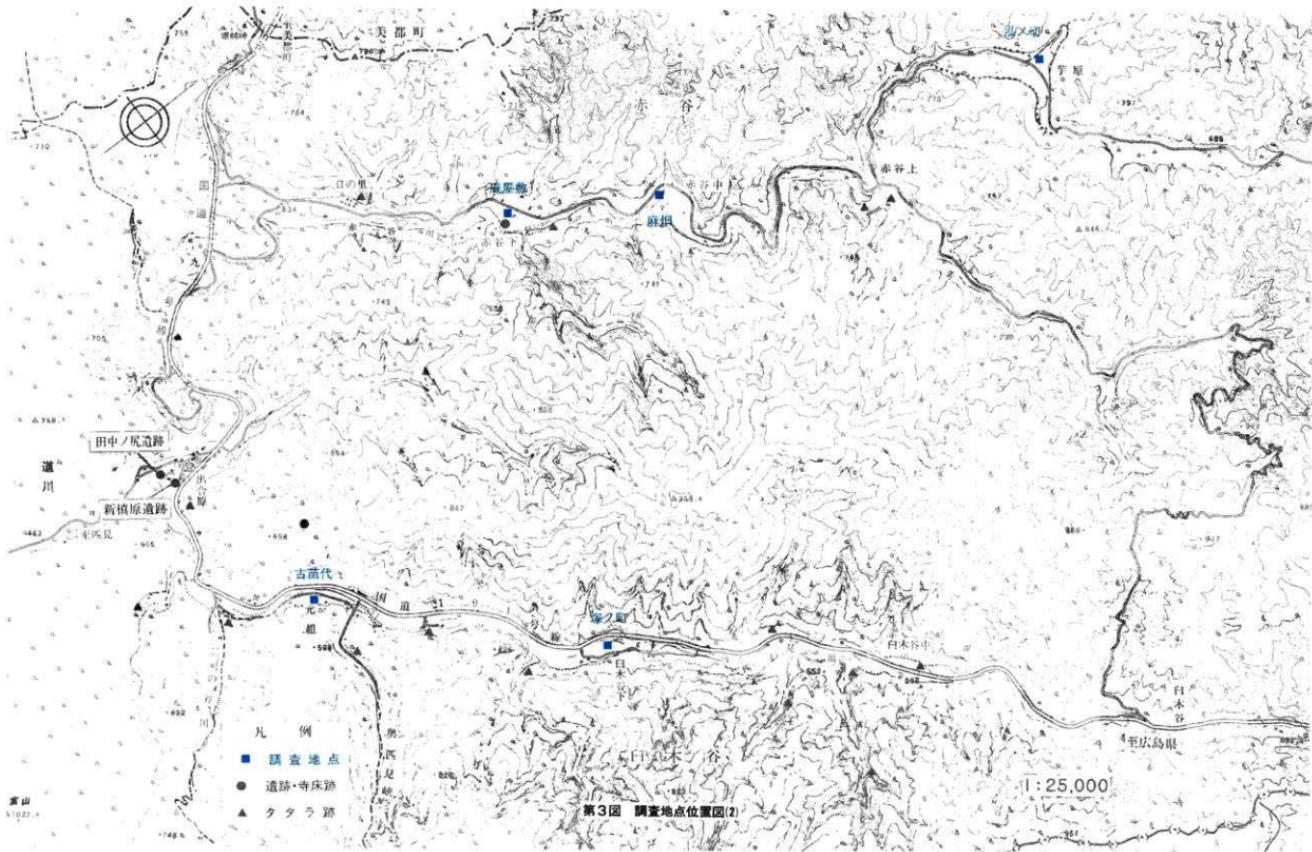
〔注3〕 匹見町教育委員会『県営圃場整備事業に伴う発掘調査報告書ダヤ前遺跡』 平成8年3月

〔注4〕 匹見町教育委員会『匹見町内遺跡詳細分布調査報告書Ⅷ』 平成7年3月

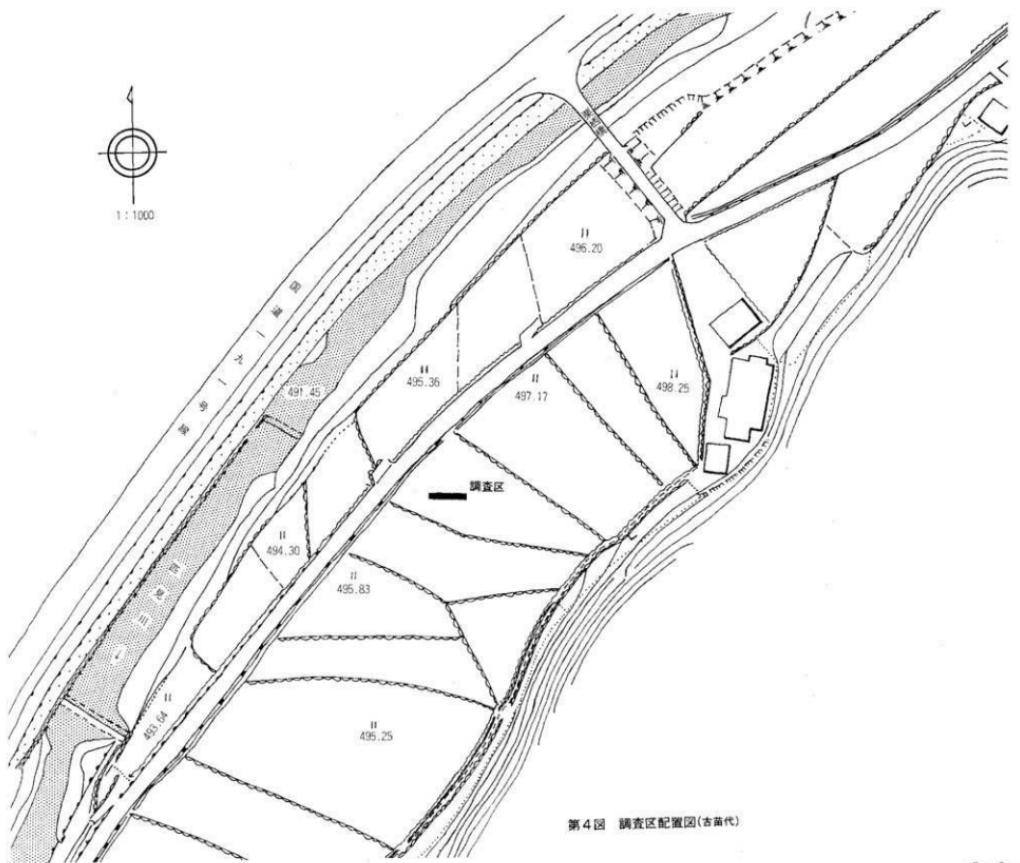
〔注5〕 中国新聞社『中国地方地学辞典』 昭和62年9月

〔注6〕 本書の第4章の第1節 一地形的立地と歴史的景観—





第3図 調査地点位置図(2)



第2章 古苗代調査地点

第1節 地形的立地と歴史的景観

本調査地点は、島根県美濃郡匹見町大字道川イ226-1番地に所在し、そこは水田地と化されている（第4図・図版1-1）。

地点の北西側50mには、中国背梁山地に源をもった匹見川本流が南西流し、その岸沿を国道191号線が走っている。匹見川が形成した河岸段丘は、左岸に狭長に発達していて、比高差約5mを測り、その標高は約496.84mである。また段丘の南東側の水田地を挟んだ山裾沿いには人家が点在するという立地にある。

本調査地点周辺は、未開発地域ということもあって、原始古代遺跡は頗著ではない。しかし、森林の豊富な山間地帯という立地性は、近世期に盛んであった鉛^{たん}が発達していたらしく、谷の出合に比較的多くみられ、また対岸の北東側1kmの丘陵地には、寺院があったと伝承されている所も存在（第3図）し、歴史遺跡はみられるのである。しかし原始古代遺跡が近くにないかといえばそうではなく、1.5km下流の赤谷川との相会地には著名な新櫛原遺跡（縄文前期～旧石器）があり、その対岸には縄文前期・中期の田中ノ尻遺跡も存在している（第3図）。

第2節 調査概要

1. 調査区の設定

調査の対象地は水田（第4図・図版1-1）で、地名を古苗代といふ。その水田は山裾一河側が約50mあって、その表面標高は496.65～496.84mで、河側が約20cmばかり高かった。調査区は、その水田の河寄りに任意に設けることにし、L形は水田の形に合わせ、東西方向に10m、南北方向に2mとした（第4図）。

2. 層序と層位

I層は水田耕作土で、層厚18～23cmを測り、比較的に厚い。II層は客土で、黄灰色砂土。しかし部分的であって、いずれも尖滅している。I・II層とも出土遺物は皆無であった。

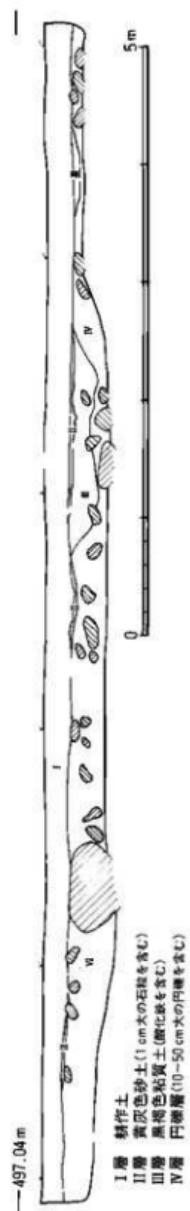
III層は黒褐色粘質土。本層は東半分に部分的に嵌入していて深削のもので24cm、薄層のものは7cmを測る。下層のIV層との関わりからみて、おそらく匹見川の溢流によって残存した層序と考えられる。遺物・遺構とも皆無。IV層は10～50cm大の石を含んだ河床疊。部分的に削除して下層を探ろ

うとしたが、河原石が重畠し困難であったため、以下は中止した
(第5図・図版1-2)。

第3節 結句

以上のように本地点を堀削してみたかぎりでは、遺物・遺構の皆無により、文化層は無いものと考えられる。もし存在したならば、Ⅲ層の黒褐色粘質土と想像されるが、層序・地形関係からみて、おそらく匹見川による横溢によって壊削されたものと判断される。

(渡辺友千代)



第5図 土層図(北側)

第3章 塚ノ町調査地点

第1節 地形的立地と歴史的景観

1. 地形的立地

本地点は、島根県美濃郡四見町人字道川イ312番地ほかに所在する。そこは40m北西側には四見川本流がC字形に周流し、対向する南東側70mには山裾がせまっている。また北東—南西方向には、四見川が形成した河岸段丘面が約6mの比高差をもって狭長にのびている（第6図・図版2-1）。このように四見川の左岸に形成された段丘面は、その大部分は水田と化され、民家は南東面の山裾に数軒みられる。また南西流する四見川の対岸の山裾には、山陰側と山陽側を結ぶ国道191号線が貫道しているが、平地はみられない。

2. 歴史的景観

本地点の周辺には、周知の遺跡として数箇所の鉛跡たたらが存在する（第3図）。その1つは、400m南側の小谷が四見川に合流する地点の「下臼木谷鉛跡」が最も近く、上流側に向かっては「茗荷谷鉛跡」「藤丸銀治屋鉛跡」「マカメ谷鉛跡」などとづき、広島県境まで他にも5箇所の鉛遺跡が存在している。

本地域において鉛跡以外の遺跡は確認されていないが、狭小とはいえ河岸段丘が形成された立地性からは、原始古代遺跡の存在する可能性があると思われる。現に、広島県側に越境した八幡高原には「押ヶ崎遺跡」「樽床遺跡群」などの先史器（旧石器）時代の分布状況からも充分頼かれるし、そして近年まで該当地とは通婚圏域であったのである。

本地域は、竹田・栗栖・河野といった姓称にみられるように、その多くは山陽筋の越境した人々によって開拓されたものであった。このように鉛遺跡が多いのは、勿論恵まれた森林にその理由付けされようが、一方、山陽側で盛んに行われていたことにより、その技術が導入しやすかった地域性も見逃すことはできないであろう。とくに本地区にある本谷鉛跡（町指定史跡）などのは、加計の佐々木氏の経営によるものであったことなどからもわかるのである。

第2節 調査概要

1. 調査区の設定

水田である調査対象地は、やや舌状的に突出した地形を呈しており、調査区はその西側に任意に設定することにした。その調査区は、水田の形状から東西方向に10m、そして南北方向には2mを測る長方形のものとし(第6図)、その面積は20m²であった。しかし堀削していく過程で、遺物の包含層が確認されたため、範囲確認の必要性から後に調査区を増設したのである。

それは既設の西端から南側に5m測った地点に2mの方形のもの(B区)と、その地点から東側に4m測って2m方形区を設けた(C区)。しかし、その増設した2調査区からは包含層を確認することができなかったので、10mの長方形区(A区とする)の出土状況からみて、新たに南東端から1m測った地点に1m×4mのものを設けた(D区)。

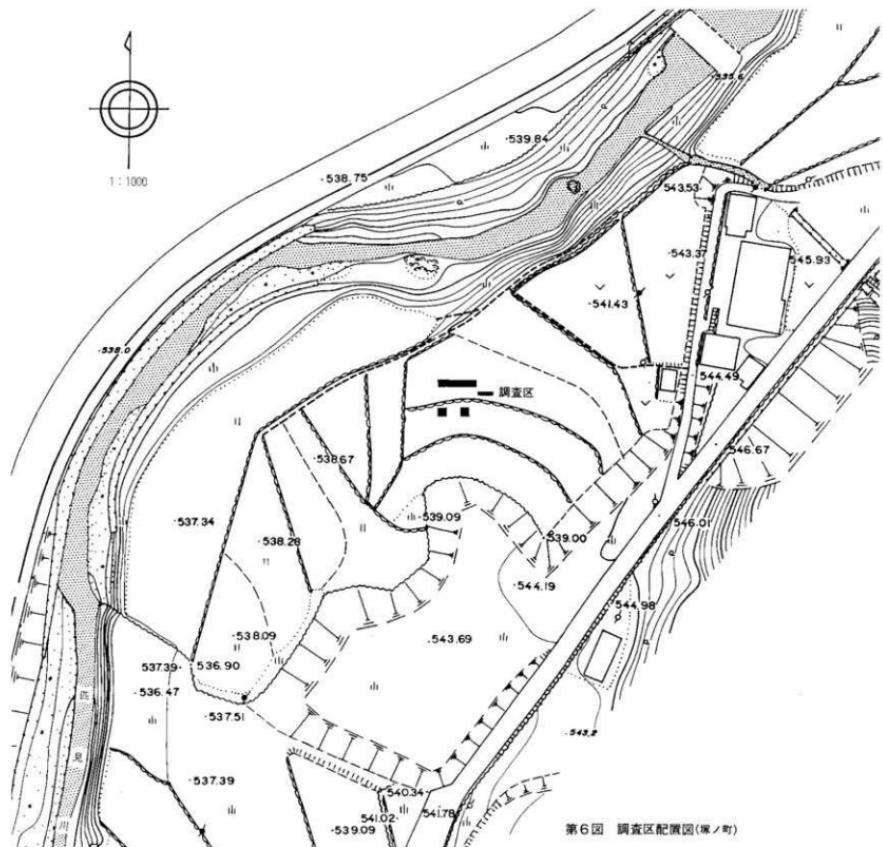
したがって最終的には2m×10m、2m×2m、2m×2m、1m×4mの4調査区となり、発掘面積は32m²であった(第6図)。なお区名は、最初に設定したものとA区、そして設定順にB区、C区…と称することにしたため、呼称順は左回りとしている。

2. 層序と層位

本調査地点での基本的層序は、I層の水田耕作土、II層の黄褐色砂土の客土、III層の橙褐色粘質土、IV層の黒褐色粘質土、V層の黄褐色砂土、VI層の円礫層(河床礫)の順で堆積する(第7図・図版2-2)。

A区 I層の水田耕作土は、層厚14~22cmを測るが、河側の西寄りに向かって薄くなっている。本層からは遺物として陶磁器類などが数点出土している。II層は、客土と考えられる黄褐色砂土で、部分的に赤褐色の酸化鉄が含浸していた。層厚は深層部で10cmを測るが、河側の西寄りに向かって尖滅する。III層は橙褐色土で、粘性を帯びている。本層は山寄りの東面に部分的にみられ、山地の真砂系の嵌入土と考えられる。

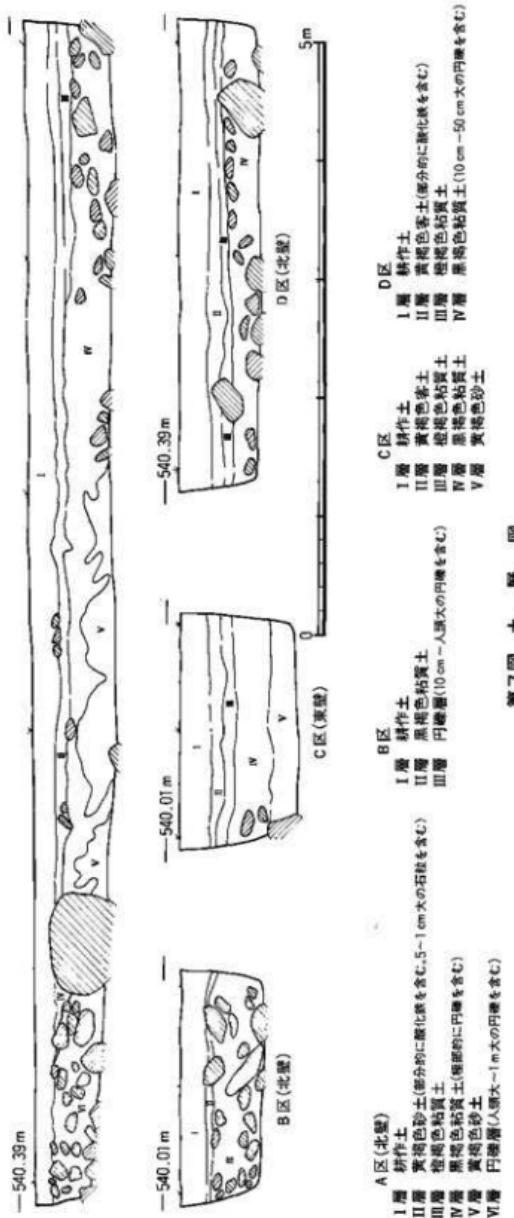
IV層は、粘質系の黒褐色土で、最大層厚は40cmを測り、東面に片寄っている。本層には30cm大の河原石が可成りみられたが、意図的な配置とは思われず、自然的な嵌入した石と捉えられた。また下面の層界面は凹凸していて遺構かと思われたが、形状からみてモグラなどによる生物痕と判断した。したがって、遺構らしき跡は確認することはできなかったが、上位面には人為な石器の剥片が数点検出された(第8図・図版3-2)。V層は、黄褐色砂土であった。しかし部分的な堆積土がある、分層すべき層序であったかは判断できかねたが、層序の成因に関わることなので捉えておいた。むしろ下位層の円礫層に包括すべきものかも知れない。VI層は、円礫を中心とした河床礫である。本層は、河寄りの西端部は盛り上がっており、上面はI層の水田耕作土層と層界を一つに



している。これは堆積状況、あるいは地形的立地からみて、匹見川による横溢などによって、Ⅰ層以下の層序を流失した後に円礫が堆積したものと想定される。なお、V・VI層とも遺物・遺構とも確認していない。

B区 本調査区は、A区より約40cmばかり低い段の水田に設けたもの（第7図）。この調査区では河寄りの西側ということもあり、またA区より低い位置にあるということもあって、層序は前区の西端部と同様な状況を呈していた。つまりⅡ層以下が河床礫の円礫層にとって代られているのである。したがって、そういった層序であったため文化層は確認することができなかつた。

C区 本調査区は、B区の4m東側に設けたもので、表面標高約540.1mを測る。そのⅠ層は、水田耕作上で、層厚約22cmを測って比較的水平に堆積していた。Ⅲ層は、黄褐色した客土で、部分的に茶褐色した酸化鉄が含浸する。層厚は6~15cmを測り、東半は厚く、西面に向かっては薄くなっていて僅か上昇していた。Ⅳ層はA区で捉らえたように、橙褐色で真砂系の川土



第7図 土層図

と判断したもの。やや粘性を帯び、層厚は8~13cmを測り、河寄りの東側に向かって上昇していた。

Ⅳ層は黒褐色粘質土で、25~30cm堆積する。その黒褐色土からは上面に0.5~1cm大の炭化物が検出されたが、形状からみて人為的とは思われず、自然的炭化物と判断した。また本層には西側を中心に20cm大の河原石が少數検出されたが、これは河床疊が局部的に嵌入したものと考えられる。V層は、黄褐色砂土で、土壤的には下位層に分層している河床疊に包括できる層と思われる（第7図・図版3-1）。

以上、C区の層序・層位状況をみてきたが、いずれの層序とも文化包含層と捉らえるものは確認することができなかった。

D区 本調査区は、A区の南東端から南側へ1m測った地点を軸として、それを起点に4m東側へ延ばしたもので、幅は1mのものとした。なお、表面標高は約540.3mであった（第7図）。

そのI層は水田耕作土で、層厚20~28cmを測り、他の調査区の耕作土と比べて最も厚かった。なお、本層では2点の陶磁器類が採取された。II層は客土。層厚は8~15cmを測り、やはり他の調査区のものと比べて厚い。本層には下面を中心に、部分的ではあるが、赤褐色系の酸化鉄が含浸する。III層は、棕褐色した真砂系の山土で、層厚7~15cmを測る。下面を中心に10~20cmを測る河原石がみられた。遺物らしきものは出土しなかった。

IV層は、粘質性の黒褐色土である。層厚は20~30cmを測って、東側が深い。全体的に小砾が嵌入し、また河原石は10~50cmのものが多くみられ、下面是充填する。なお、本層からは遺物としては、黒褐色した黒耀石の石器剝片1点が検出されている（第8図・図版3-2）。地山と想定されるV層は、本区では河床疊であった。

3. 出土した遺物

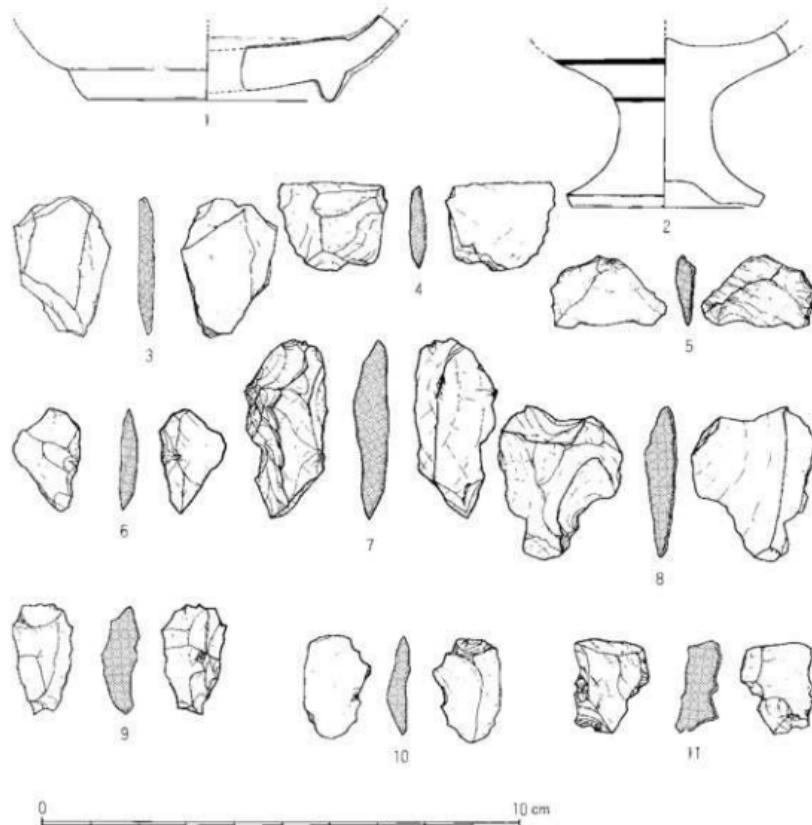
はじめに 本調査地点では陶磁器類14点、石器剝片類10点の合せて24点の遺物が出土した。そのうち陶磁器類は、11点がA区のI・II層で、残りの3点はD区のI・II層で採取されたものである。また、石器剝片は8点がA区、残りの1点はD区検出されている。以下、このうち陶磁器類で2点、石器剝片類で9点を、凡そ川土順で紹介していくこととする。

陶磁器 1は、A区の客土に出土した底部の青磁（第8図・図版3-2）。体部上半が折損しているので器形は判らないが、おそらく大目碗であろう。内外面の青釉はぶつ厚く、とくに屈折部は厚い。釉は骨付けを越えて高台外面にまわるが外底には至らず、その面は赤茶褐色を呈し素焼風。また青釉には氷裂文が内外面ともみられるが、他に蓮弁文様などの施しについては底部ということもあって捉えることはできない。釉層の厚さなどから捉らえて、おそらく龍泉窯系の青磁と判断される。

2は、A区の耕作土に出土した高杯系の飲食器の下部と思われる（第8図・図版3-2）。台

輪径は4cm、最小脚部径は2cm、台輪から坏底部までの高さ3.4cmを測り、口縁部は折損する。内外面とも薄い透明な釉が施されているが、外底には至っていない。また胎土は精緻で淡青色を呈し、外面の体部下半には2本の茶褐色による線状の描画がみられる。おそらく青白磁と思われる。

石器剝片類 3は、A区のI層耕作土に出土したもの。石材は粘板岩質のもので、背・腹面とも擦痕が認められる。加撃は少くとも上下2方から与えられているが、いずれも打面は弱く、意図的とは思われない。勿論、石質にもよるとは思われるが、4は、A区のI層に出土した安山岩製の剝



第8図 出土遺物実測図

片で、2cm大の台形を呈する。主力の打面は2方向にあり、その1面は上方から延びているが、石目の段差があって一様ではない。また右辺からのものは、縁辺が鋭利で刀部を形成している。重さ1.8g。5は、A区の耕作土から出土した三角形を呈する剝片。背面の加撃は上方の頂点にあって、扇状に裂離する。腹面は3方向からの打面がみられるが、やや石理が不明瞭で、階段状に裂破している。しかし扇端面は鋭利な刀形を呈する。

6は、三角形を呈した剝片で、石材は安山岩質のもの。やや風化して灰褐色を呈する。背面の右縁には剥離状がみられるが、加撃痕である。また腹面は、左右辺からの打面が交差した相会部で縱走の稜をつくっている。

7は、A区の3層から出土した安山岩製の横長状の剝片。器高3.6cm、最大器幅1.7cm、重さ4.5gで厚手。主力の打撃は図掲によるところの右辺にあって、左縁の弧状部には粗い階段状の剥離が施され、角度は鈍い。なお下端部は斜向に折損する。また腹面は、背面と同様の方向からの加撃、つまり左辺方向からの先行剥離の打面が筋理にそってみられるが、その端辺は石目の継によって上下方向に稜を有している。

8は、A区の3層に出土した安山岩質の剝片。器径は2.5cm×3.1cm、重さ2.3gである。主力打面は3方向からのものがよめる。その1つは左辺からの先行打面、2次的な剥離が上方と右下方にみられる。腹面には左辺からの単打面。右縁は弧状として先端部は鋭利であり、部分的に小さく折損する。

9は、A区の3層に出土した筆葉状を呈した黒褐色の黒耀石。それは0.6cm×1.2cm×2.2cmを測り、重さは1.5g。背面の加撃方向は左辺からである。2次的な打面と思われるは左上からのものと、左下からのものがみられるが、主剥離面時での衝撃剥離のものかも知れない。腹面の主力加撃方向は、背面でいう逆方向の右辺にあることから、この剝片は同一方向からの整形品と思われる。なお、腹面の右縁の階段状剥離は、打瘤による剥離痕で、器軸は腹面側に反る。10は、D区の4層に出土した黒褐色の黒耀石。器高2cm、幅1.3cm、厚さ0.35cm、重さ0.7gを測る。背面でいう右辺側の点打面で、腹面側に反った倒れの剝片である。11は、A区の4層下位面に出土した黒褐色した黒耀石。器高1.8cm、幅1.5cm、厚さ0.5cm、重さ1.5gを測る。ねじれが生じているものの、一方では、凡そ上下方向つまり両端打撃による剥離とも見受けられる。また打点は、左辺の側縁部にあり、そこには打瘤裂痕が顕著である。

第3節 結句

本調査地点の調査の概要について記述してきたが、詳細については不明の点がみられる。それは不確定のⅠ・Ⅱ層は別にして、Ⅲ・Ⅳ層の遺物包含層での出土状況についてである。つまりⅢ・Ⅳ層に出上した遺物が一連した継続の中に捉えられるものなのかは、僅少の個片的なものからは、土器を共伴していないこともある、定かにすることはできなかった。また、加えて狭掘ということもあって、これらの石器の遺物がいつに想定されるものか、についても特徴を見い出せないでもないが、軽がるしく判断することはできない状況である。つまり、僅少の出土した石器遺物には形状的に縄文早期、あるいはそれ以前ではないかと捉えられるものが、出土層序において余りにもそれらが上位層という不合理性が生じていることにあるからである。

ただ今回の調査では時期は別にして、垂直の分布状況とともに、また平面的分布においては調査区の北東側に広がりをもっているらしいことなどが捉えられた、ということのみにして終えることにしたい。

(渡辺友千代)

第4章 庵屋敷調査地点

第1節 地形的立地と歴史的景観

本調査地点は、島根県美濃郡匹見町大字道川イ905-3番地に所在し、そこは水田である（第9図・図版4-1）。

その地区は赤谷中と呼ばれ、広島県と隣接した北東の空山（1,060m）の南東麓から流れ出る赤谷川が形成した河岸段丘に立地している。その河岸段丘は、下流側のものが左岸に、上流側のものが右岸に形成されていて、いずれも狭長である。調査地点を設けたのは、下流側のものよりはやや規模は大きく、平坦で良田の払がる上流側の右岸のものを対象地として選んだ。

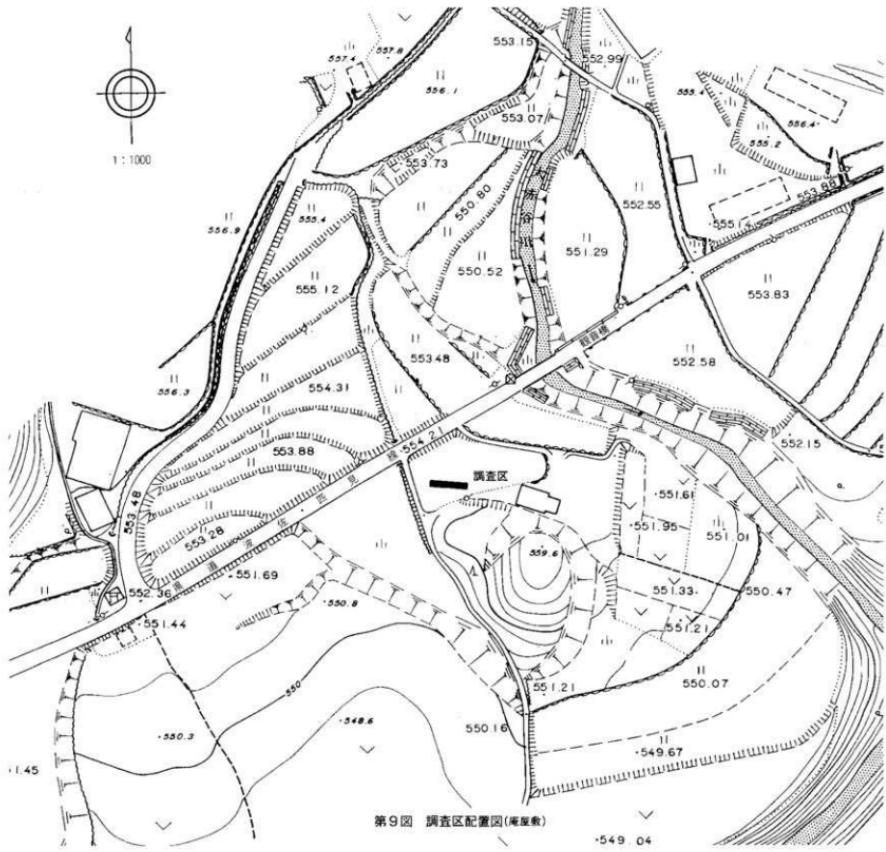
その該当地は、南東側を南西流する赤谷川が河岸段丘端を形成して約1kmあり、幅は広い中央部で約200m測って、両端は尖滅状となっている。また河側と対向する北西側は丘陵地となっていて、その裾野には昭和38年の豪雪以降集団移転をよぎなくされて、今は人けの無い荒廃した家屋が3、4軒みられる（田畠については通い農業として耕作されている）という風景を呈している場所である。

本地区での遺跡といえば、製鉄遺跡の跡^{たれ}跡が顕著である（第3図）。これは特に藩制期に栄えたもので、藤井氏の活躍によってなされたものであった。藤井氏は鉛に必須という最大の燃料源を、大森林地帯という地の利を最大に活かして成功しており、本地区が彼らの活動の中心地であったらしい。それは本調査地点の10m南東の小丘陵には「殿様の墓」というものが存在していることからも裏付けられる。また、その山裾には益田氏から赤谷の地頭に補せられて、応永17年（1710）に建てたという自得庵の所在伝承からも窺え、調査地点とした「庵屋敷」の小字名は、その自得庵跡であった可能性が強いことからもいえそうである。なお鉛跡以外の遺跡については、現在のところ本地区ではわかっていない。

第2節 調査概要

1. 調査区の設定

調査区は、河岸段丘のほぼ中央部にあたる水田に設けることにした（第9図・図版4-1）。その地点は周りを水田が囲み、至近の東を段丘面を2分して大赤谷の谷川が南東流して赤谷川へ流れ込んでいる。また南東には比高差約7mを測る小丘陵地が隣接し、小字名は庵屋敷といい、表面標



高は約553.9mを測る。

調査区は、その水田に任意に磁北方向を基準として幅2m、東一西に長さ10mを測るものとした(第9図)。なお基準とした標高は、調査区から30m北東側の県道に設けられたKBMから求めた。

2. 層序と層位

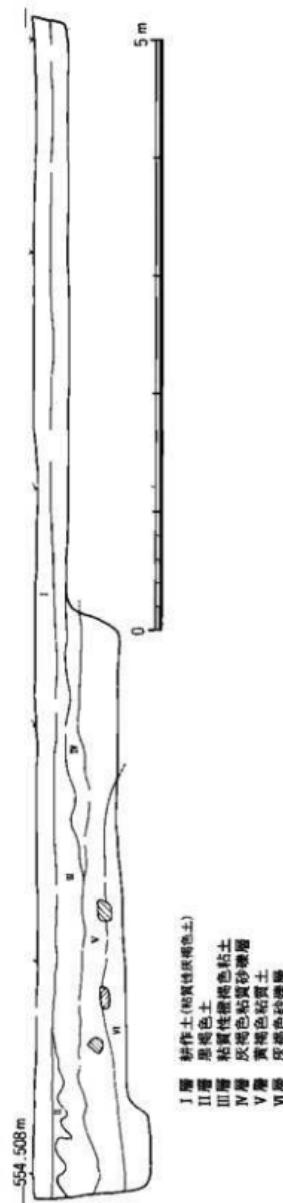
本調査区の基準的層序は、I層水田耕作土(粘質性灰褐色土)、II層黒褐色土、III層粘質性橙褐色粘土、IV層灰褐色粘質砂礫層、V層黄褐色粘質土、VI層灰褐色砂礫層の順に堆積する(第10図・図版4-2)。

そのI層の水田耕作土は、灰褐色の粘質土である。層厚は約14cmを測って、薄く比較的水平に堆積している。出土遺物としては、陶磁器類などが数点出土しているが、これらは耕作土という人為的な層より出土したものであるため、実測は行わず採集することのみにとどめた。

II層は、黒褐色土で、この層は西側の一部しか残っていない。本来は有機土として、比較的厚く地形にそって堆積していたと思われるが、水田開墾時に特に高かった東面が削平で除去されたことによると考えられる。なおI層で出土した陶器類等は、本層の上位面に包含していく可能性が強い。

つぎのIII層は、橙褐色の粘土で粘質性が強く相当しまつていて、上位面との界層が西面に一部残っているのに對して、東面に向かっては削平されており、層厚は約12~35cm測って薄くなっている。なお層状および土質を確認したかぎりでは、層序から判断して文化層の可能性が無いと判断し、II層黒褐色土で確認することができた西側部分の5m範囲に縮少することにした。

IV層は、灰褐色した粘質の砂礫層。本層はIII層に類似した粘質性のもので、5, 6cmの角礫を若干含んで僅かに黒っぽい。層厚は6~14cm測って、西面中央部で尖滅



していた。有機質的な層状から考えて、南東側の小丘陵地からの崩壊土と考えられるもの。

V層は、約5～15cm大の角礫を含んだ黄褐色粘質土である。層厚は15～30cmを測り、やや中央部で厚く堆積していた。

VI層は、灰褐色した砂礫層。層厚はかなり深く、水平に堆積している。感覚的にはあのが、砂礫層といっても河床礫ではなく、角礫で火山灰層ではないかと判断するものであった。

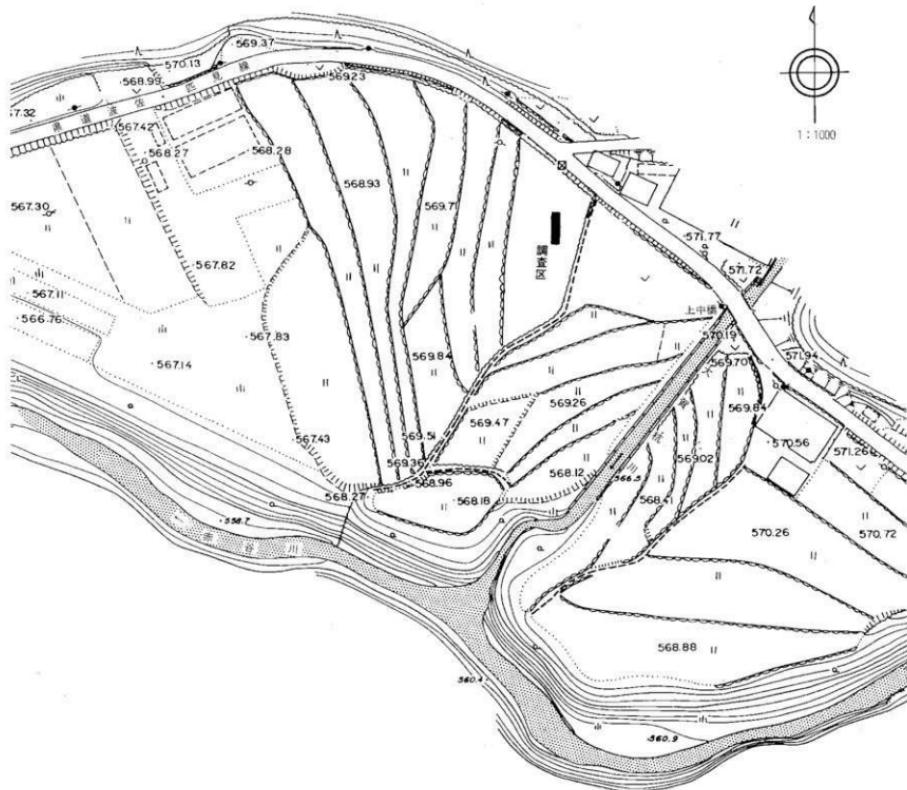
以上、層序状況について述べてきたが、II層以下の全ての層位には出土遺物・遺構とも検出されていない。

第3節 結句

本調査区での層序状況からみて、II層とした黒褐色土は縄文時代以降の堆積層と考えられるが、そのほとんどが削平されていて、残存部からも出土遺物がないこともあるって確認することはできなかつた。なお下位層においては、上質や色調から分層をしているものの、灰褐色～黄褐色の粘土でおおわれており、理化学的分析は行ってはいないものの、感覚的にそれらが火山灰の堆積土ではないかと思われた。

したがって、I層の耕作土以外は人為的な出土物がないことからみて、本調査区においては文化層は存在しないと判断した。

(柴田 美文・渡辺友千代)



第11図 調査区配置区(麻田)

第5章 麻田調査地点

第1節 地形的立地

本調査地点は島根県美濃郡匹見町大字道川イ827-4番地に所在する。その地点は水田であって(第11図・図版5-1), その地名を麻田といい, 本調査地点をこの字名を冠して呼称することにした。

本地点の河岸段丘を形成したのは、空山(1,060m)の山裾に発して南西流した赤谷川である。その赤谷川は地点の60m南側を比高差約10m測って周流しているため、河岸段丘は右岸に発達していて、その形状は半月を呈している。段丘は南一北のほぼ中央部の広い部分で150m, そして東一西は約350m測って両端は尖滅状となっている。北側の山裾には、県道波佐・匹見線が貫通していて、その道沿いには家屋が3, 4軒点在しているが、現在は住む人もなく、たまに田畠耕作のため訪れているにすぎない。

調査の対象地とした水田は、そうした河岸段丘の高地面に当たる標高約571.406mを測る位置である。なお、調査地点の南東側10mには、大賀抗といわれる谷川が段丘を横切るように南西流して赤谷川に流れ込んでいるという立地にある。

第2節 調査概要

1. 調査区の設定

調査の対象地とした水田(第11図・図版5-1)は、赤谷川とは比高差約10m、大賀抗川との比高差約4m測った地点で、その表面標高は約571.406mであった。調査区は、南北一東西約200m間のほぼ中央部に当たり、北側の山裾から約5mの水田に任意に設けることにした。区形は水田に合わせて南北方向に8m、東西方向に幅2mとした長方形で、発掘面積は16m²である(第11図)。

2. 層序と層位

本調査区の基本層序は、I層の水田耕作土、II層の黄橙褐色粘性小角砾層、III層の黄灰色角砾層、IV層の黄橙色粘土、V層の黄褐色砂砾層、VI層の黄橙色粘土、VII層の黄灰色大角砾層の順に堆積していた(第12図・図版5-2)。

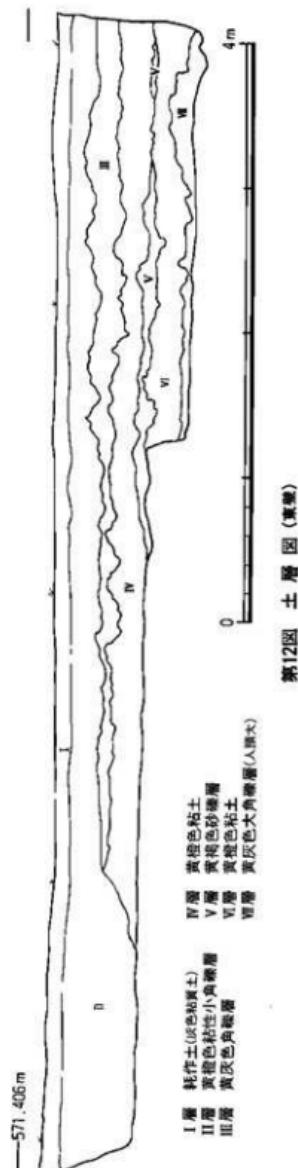
そのI層は、水田耕作土で灰色の粘質土であった。層厚は薄く約10cmを測り、比較的水平に堆積する。本層からは数点の陶磁器が数10点出土しているが、人為的な層から出土したものなので、実

測せず採集のみとした。Ⅲ層は、黄橙色をした粘性の角礫層である。層厚は北端側が80cmを測って特に厚く、東側に向かって2m地点まで急に上昇した後は、10~20cmを測って次第に薄くなっていくものの、北端側のような上下差はない。土質は粘質土で、その粘性の土中に角ばった山石が多く嵌入している。大きいものは径10cmを測るものを含んでいるが、相対に小礫である。上質は粘性を滞っていたので、鋸で堀削するのも困難をきたすような状態であった。なお本層からは人為的な遺物はみられなかった。Ⅲ層は、大きな角ばった山石を含んだ黄灰色を呈した角礫である。大きいものは25cmを測るものがある、その層厚は尖滅部分から25cmを測って河側の南面側が厚くなっている。また土壤は上位層のものに比べて粘質はあるものの、パラッとした感じで詰ってはいない。むしろ角礫の間には空隙さえあり、堀削においても剥すといった状況であった。

Ⅳ層は黄橙色粘土で、礫は少ない。その下層のV層は、黄褐色の砂礫層で、非常に薄く堆積していた。土質は砂系で、東側の大賀杭谷の溢流の堆積土ではないかと思われた。なお、以下の層位については、南側の2m×3mの範囲のみを堀削することにした。VI層は、IV層と同様な層状で、黄橙色粘土である。層厚は10~25cmを測り、若干湿氣をもつ。やはり本層でも出土遺物はなかった。その下層のVII層を僅か堀削を試みたが、黄褐色の砂礫層（河床礫）におおわれ、堀削は困難となり、やむなく中止とした。

第3節 結句

本調査区において有機質土は、水田耕作土以外には堆積していなかった。そのうちⅡ・Ⅲ層は粘土質の黄色土と、大きさに違いはあるものの角ばった山石で構成された層位であった。またⅣ・VII層はまったくの粘土の層位で、その



第12図 土層図 (実測)

間にVの円礫が挟まれたような状況で堆積したいた。このV層は、おそらく赤谷川が人賀抗谷のいずれかの貫流によってもたらされた層位と考えられる。したがって上位の層は丘陵地などからの崩落土によって成され、まは下位層は円礫などの堆積からみて、赤谷川など形成したものと人柱で埋むことができる層序状況であった。

しかし、本調査区で削削したかぎりでは、本報告のとおり考古学上で捉えられるものは皆無であった。

(渡辺友千代)

第6章 淙ノ切調査地点

第1節 地形的立地と歴史的景観

本調査地点は島根県美濃郡匹見町大字道川イ619番地に所在する。その地点は水田と化されていて、地名を「^{おののかり}」といい、泓とは、この地方の方言で湿地をいう。よって、本調査地点をこの字名を附して「泓ノ切」調査地点と呼称することにする（第13図・図版6-1）。

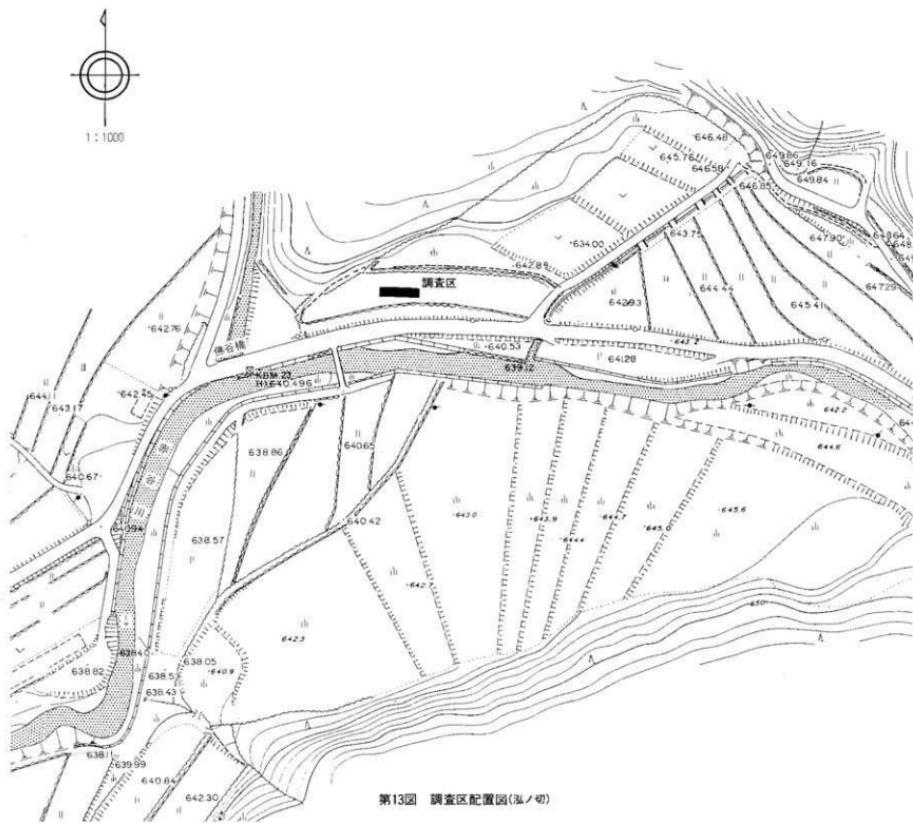
本地点の10m南側には、空山（1,060m）の山裾に発した赤谷川が南西流しており、その赤谷川が蛇行して形成した河岸段丘は、左右に発達していて山間部であるにもかかわらず、調査の対象地周辺は盆地状に拓け、周辺の山地は丘陵地状を呈している。とくに調査地点の対岸南側は平坦な台地状を呈していて、田畠が拡がっている。こうした段丘を形成した東側の水田を挟んだ山裾沿いには、昭和40年代まで人家が点在していたといい、その人家から河側へはなだらかな丘陵をつくっている。調査の対象地点とした水田は、こうした立地の赤谷川との比高差約3mを測った地点にあり、標高は約642.09mであった。調査地点西側の指呼には、佛谷からの谷川と赤谷川が相会していて、その赤谷川は、下流端の新横原遺跡が存在する出合原地区で匹見川本流と合流し、匹見中央部へと流下しているのである。

本調査地点の周辺は未開発地域であるためか、原始古代遺跡は顯著ではない。しかし、調査地点を中心にして1km以内には3箇所の^{跡跡}が確認されており（第3図）、また対岸の南西側10mの水田跡には、平家の落人といわれる土左岡藤左衛門がそこに来地、最初に稻の種を三粒まいて開拓の第一歩をなした、という稻作起源の三粒田伝説が今日に伝えられ、その当人の墓といわれるものが対岸南東30mの山裾近くに今も残っていることから、この地が少なくとも中世以降、人々の営みがあったことを証拠付けられる。

第2節 調査概要

1. 調査区の設定

調査の対象地とした水田（第13図・図版6-1）は、赤谷川との比高差約3m測り、山裾より10m、河側へ10m測る位置にあって、その表面標高は約642.09mであった。調査区は、その水田の中央から西側へ任意に設けることにし、区形は水田の形に合わせ、東西方向に10m、南北方向に2mとした。よって発掘面積は20m²である（第13図）。



第13図 調査区配置図(泓ノ切)

2. 層序と層位

本調査区の基本層序は、I層の水田耕作土、II層の小礫層、III層の灰色砂土層、IV層の河床礫層の順に堆積していた（第14図・図版6-2）。

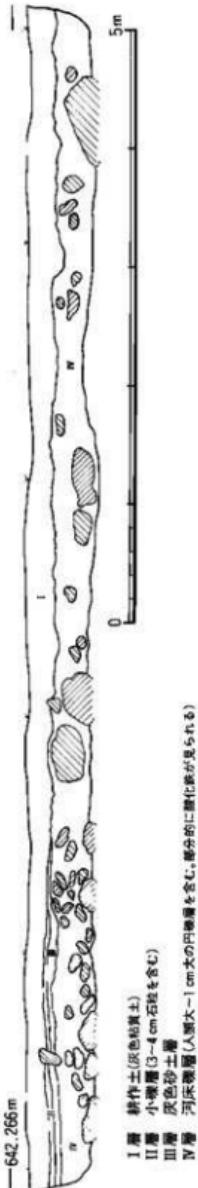
そのI層は灰褐色土で粘質性の水田耕作土であった。層厚20~25cmを測り比較的厚く、ほぼ水平に堆積する。つぎのII層は小礫層。西側は5cm測るが、中央部に向かって薄くなり、3m地点で尖滅していた。なお、本層には3~4cmの小石を多く含む。III層は灰色砂土層。本層はII層と同様に西側は層厚5cmで、しかし、中央付近4m地点でしだいに薄くなっている。このII・III層は、本来東方にも同じように堆積していたと思われるが、水田開墾時に強く削平され除去されたと想定される。I・II・III層いずれも人為的な出土遺物は皆無であった。

下層のIV層は人頭~1m大の円礫を含む河床礫である。中央から西側は、人頭~1m大の河原石を多く含み重疊状で、部分的に酸化鉄が含浸していた。中央から東側は、大きな河原石が少なくなり小礫となっている。本層での出土遺物は皆無。その下層を一部削削しようとしたが、1m以上の河原石に阻まれ、また下層からは湧水で困難のため、以下はやむをえず中止した。

第3節 結句

本地点における層序は、下位層に削削していくほど湿水化していく。その主因は、本地点が赤谷川の蛇行による周流域であり、比高差が僅かのため、「私ノ切」という字名が示すように、沢地を形成していたものと判断される。そのため、人々の生活域としては適さなかったものであろう。上述のとおり、本地点を削削してみると、遺物・遺構の皆無により、文化層は無いものと考えられる。

（中井 将胤・渡辺友千代）



第7章 小 結

今回、道川地区県営調査整備事業に先立ち、白木谷・赤谷地区の詳細分布調査を実施し、その内容については、上述のとおり報告した。

その結果、5地点の調査対象のうち、4調査地点では考古学上問題になるようなことはなかった。しかし塚ノ町調査地点では文化的な包含層を確認することができたことは、両地区において今まで原始・古代遺跡が確認されていなかったこともある、とくに意義深いものだといえる。ただ、今回の調査では分布調査ということもあって調査面積も狭く、出土遺物も僅少であるため、時期や性格などについて把握するに至っていない。

今後はこの調査結果を踏まえ、事業者側と埋蔵文化財保護あるいは保存について話し合い、より良い結果を出してこそ、今回の調査が活きるものと確信して終えることにしたい。

(渡辺友千代)



1. 古苗代地点遠望(南西から)



2. 挖削状況(西から)

図版2



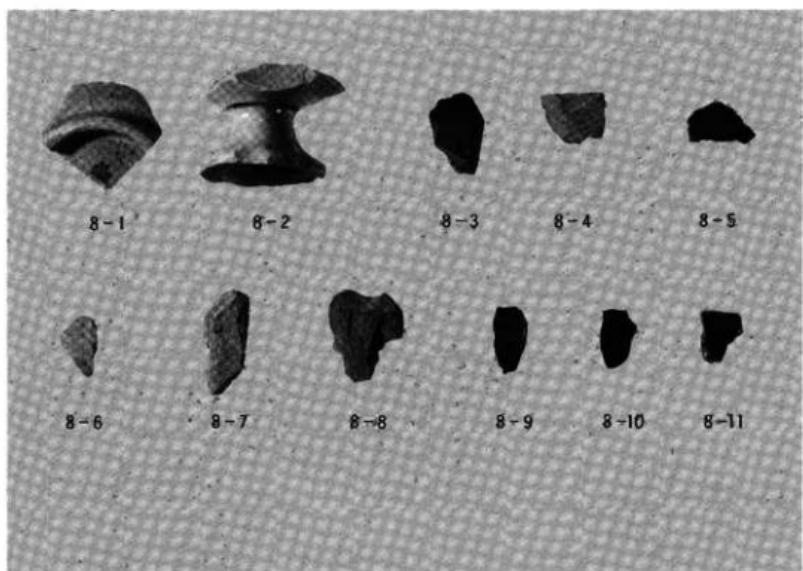
1. 塚ノ町地点遠望(南西から)



2. A区掘削状況



1. C区掘削状況(北東隅)

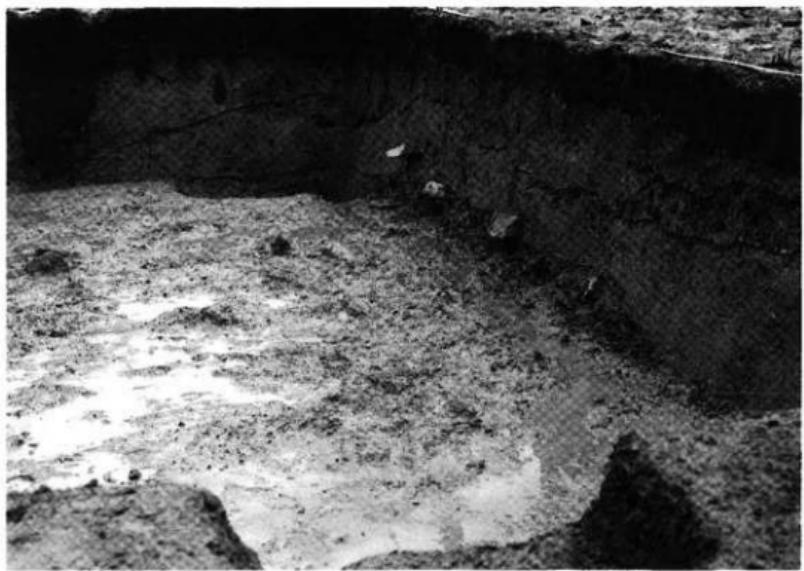


2. 出土遺物

図版4



1. 庵屋敷地点遠望(北から)



2. 調査区の北西側状況(南東から)



1. 麻田地点遠望(西から)



2. 挖削状況と東壁状況

図版6



1. 混ノ切地点遠望(北東から)



2. 掘削状況と北壁状況

平成8年2月28日 印刷
平成8年3月29日 発行

匹見町内遺跡詳細分布調査報告書

発 行 匹見町教育委員会
島根県美濃郡匹見町 1260

印 刷 有限会社 谷 口 印 刷
島根県松江市母衣町89
